

ベケット、不在者の存在

堀田敏幸

一、マーフィーという存在

小説『マーフィー』（1938年）は男女の愛を現実生活の中に捉えた作品として、ベケットの創作の中でも特異である。『マーフィー』以前の初期作品『並には勝る女たちの夢』や『蹴り損の棘もうけ』も恋愛を描いているが、主人公の恋する女性が多数に及ぶために、恋愛が生活状況の中で深く追求されているとは言い難い。『マーフィー』では主人公と恋人のセリアとで生活信条が違うことから、どんな方法を用いれば二人が結婚による共同生活を送れるか、ということが大問題として浮上する。男性のマーフィーは生活のために仕事をすれば、愛は破壊されてしまうと主張し、女性のセリアは共同生活のためには、少なくともどちらか一人が働いて生計を立てなければならないと考える。一般的には誰もがセリアと同様の生活方法を選んで、愛の巣を築こうと希望を抱くであろう。無収入で結婚生活をするにはどうすれば良いか。こんな理不尽な生活設計が成り立つのは、すでに莫大な財産を所有している人物に限られる。マーフィーはといえば、恋人と婚約する前から浮浪者であって、赤貧のその日暮らしに甘んじている。セリアも毎日の生活が精一杯であって、貯蓄などの余裕はない。一体、二人は共同生活の難局を乗り切れるのか。

それにしても、セリアはマーフィーが愛の告白をしたとき、どうして結婚を承諾したのか。彼女にはマーフィーに職がなく無収入であることは、この時点で分かっていたはずではないのか。それなのに彼女が彼のプロポーズを受け入れたのは、マーフィーが無職であるとしても、彼女が働いて生活費を工面すれば、十分に結婚生活を続けていけると判断したのであろうか。彼女は母方の祖父にあたるケリイに語っている。その内容は、マーフィーがダブリンで生まれたこと、キグレイという伯父がいて、かなりの年金を得ていること、そして「彼女の知るところでは、彼が仕事を何もしていないこと、時には入浴場に行くだけのお金は持っていること、未来が明るいものであると彼が信じていること、そして昔の出来事とやかく言ったりしないこと⁽¹⁾」である。さらにケリイの「何で生活しているんだい？」という質問に、セリアは「わずかな慈善のお金よ⁽¹⁾」と答えた。マーフィーに対するこれらの人物評価の中で、セリアはどの点に強く惹かれたのであろうか。マーフィーが自分の未来に希望を持っていることだろうか。しかし、未来を保証するものは伯父の遺産でもなければ、わずかな慈善金でもないことは明らかだろう。また、彼が昔の出来事を非難することがないというような性格上の問題でもなかろう。たとえセリアが娼婦として働いたという過去があるとしても、それはマーフィーの知らぬことであろう。そうすると残る項目はただ一つ、「彼が仕事を何もしていない」という点である。

教師で心臓を止められるという特技を持つニアリイは、彼の教え子のウイリイにある時こんな質問を唐突に投げかけた。「女たちがマーフィーの何に好意を持つのか、私には理解できないよ⁽²⁾」。これに対してウイリイは困った末に、「外科的な特徴のため」と要領を得ない返事をするだけだった。ウイリイは明確な答えを返すことは出来なかったとはいえ、この二人の会話からは、マーフィーが何人かの女性から好意を持たれていることが読み取れる。ニアリイやウイリイから恋心を持たれているミ

ス・カウニハンという女性は、マーフィーに対して好意を抱いている。それでは、なぜ女たちがマーフィーに魅力を感じるのか。作者はニアリイが発した先の質問の前の箇所でヒントを与えている。ニアリイとウイリイは喫茶店に入り飲み物を注文した。この料金をニアリイに代わって、教え子のウイリイの方が払ったのである。なぜウイリイは、親切にも他人の分まで気前よく身銭を切ったのか。ウイリイはこの質問に対しては、明確にニアリイに答えることが出来た。「ある種の不幸に出会うと、僕は自分の気持ちを抑えられないようなんです」⁽³⁾。

「不幸に出会うと、自分の気持ちを抑えられない」、つまり、不幸な人間に同情心を抱き親切になるということだが、これはウイリイ一人に該当するだけでなく、セリアにおいても同じような心情的反応が起こっていると考えることが出来るのではないか。彼女はマーフィーが仕事もせず貧しい生活を送っていることに、憐憫の情をかき立てられている。普通の人間なら健康体であるにも係わらず、なぜ仕事をしないのかという非難の気持ちを持つところであろうのに、彼女は母性愛とは言わないまでも同情心、ひいては好意を抱いている。一般的な生活者であるなら、生きていく為には労働に従事して生活費を得なければならない。しかし、マーフィーはそれを拒否して平然と生きている。そのような無謀な人生を送るのは何ゆえなのか。人間であるなら、それを知りたいという誘惑に駆られるであろう。しかし、セリアにおいてはそのような疑問は後回しにされ、金銭欲のない彼への愛情が優先されることになる。

マーフィーは労働を拒否する。これが一人身の気まぐれからであるなら、他人はその人物を風来坊の変人と判断してこの人間社会に許容するであろう。しかし、彼が妻を得て家庭生活を営むとなると、世間の彼を見る目は厳しさを帯びる。マーフィーは婚約者に向かっても、「生活のために働くことで、彼は生の実質を失うであろう」⁽⁴⁾と予言的な言葉を発する。セリアは最初この考えを馬鹿げていると思い、その重大さを理解

することは出来なかった。マーフィーはこの一見、理不尽とも思える言葉をよく考えた末に言っているのか。初めてこのような威圧的な言葉を聞いた人物は、あまりに現実離れたこの内容を冗談から言われたものと判断するであろう。なぜなら、働いてこそ収入が得られ、それによって生活は豊かになるのだから、どう考えても労働が生活を破壊するという正反対の指示は、冗談以外の意味を持たないだろう。しかし、マーフィーの言葉は彼の思考の心底から発せられたものであった。

自由恋愛のいくつもの矛盾がこれほど確かな形を取って現れたことはなかった。それらの矛盾からマーフィーは、どんなにわずかな給金の仕事であっても、たとえ一時的とはいえ、彼の恋人に対して目に見える世界を必ずや消滅させることになるかと判断した。彼女はそれが意味していることをもう一度、学ぶことになるだろう。しかし、彼女にそれが出来るのか？⁽⁵⁾

「目に見える世界を消滅させる」、何という厳しい宣託であろうか。とても浮浪者である人物が述べるような言葉とは思えないような宣言だ。むしろキリスト教の『聖書』の中で、神が地上の悪に対して宣告を下すような言辞と聞こえる。それは善行を忘れ神をないがしろにした墮落の民を、その激しい怒りでもって警告する「ヨハネの黙示録」の中で示されるに相応しい言葉のように、胸に突き刺さってくる。

今はあなたの怒りの時です。今こそ死者をさばかれる時、あなたのしもべである預言者、聖人たち、あなたのみ名を恐れる小さな者、大きな者に報いを与えられる時、また、地を腐らせる者を滅ぼされる時です。⁽⁶⁾

これは神が述べた言辞ではなく、神の導きを感謝する人間の言葉である。それでも「地を腐らせる者を滅ぼされる時」という怒りの言葉と、マーフィーの言う「目に見える世界を消滅させる」という言い方が何と一致していることであろうか。マーフィーは勿論、婚約者のセリアが働いたとして、またマーフィー自身が労働に携わったとして、「世界を消滅させる」ような憤怒を起こすことはないであろう。一人の人間が世界全体を消滅させるようなことは、原子爆弾でも用いなければ不可能であるし、たとえ神の力を請うにしても、神は賛同しないであろう。なぜなら、日曜の安息日に教会のミサに行く人ばかりではなく、実際に労働に従事する人もいて、神はそれを許しているからである。しかし、何ゆえにマーフィーはそれ程にも労働を嫌悪するのであるのか。また労働の禁止を命じられたセリアは、それに従うことが可能であろうか。マーフィー自身も「世界を消滅させる」と考えた後に、「しかし、彼女にそれが出来るのか？」という疑義を表明している。セリアは恐らく、コーヒー代を払ってやったウイリイが手持ちの小銭がなかったニアリイの不幸に同情心を抱いたように、仕事をするでもなく一日を呆然と過ごすマーフィーに憐れみの感情を抱いたに過ぎないであろう。それが愛情にまで発展するとしても、その愛情にとって労働が結婚生活の障害となるということまでは、彼女の念頭にはなかったことであるに違いなからう。

セリアは結婚生活において仕事の禁止をマーフィーから告げられたとき、それは常識はずれの有り得ないことだと思った。そしてマーフィーが外出している昼間、街の市場で買い物をして帰宅すると、彼女はマーフィーが座っていたロッキング・チェアに腰を下ろすのだった。

ロッキング・チェアに座っていると間もなくして、彼女は名づけられないような欲情の現れのごとく、裸になって縛られたいという欲求が、かすかに湧き起こってくるのを感じた。⁽⁷⁾

このロッキング・チェアというのは、単にマーフィーが体を休めるために使用するだけのものではなかった。彼は七本のスカーフで彼の裸になった体や手足を他人の助けを借りずに、その椅子に縛り付けるという非常に手間のかかる方法を取った。なぜまるで悪人をロープで縛り付けて、逃げられなくさせるようなことを実行したのだろうか。それは彼がこの現実世界の現場から抜け出して、精神界へ飛躍するための方法であった。彼は精神界で生きることにより多大の悦楽を覚え、その世界こそが彼の真に存続できる場所であると考えている。「何の価値もないところで、何ものも望まず、そしてそこにおいてだけ自分を愛することが出来るのだ⁽⁸⁾」と言う。現実世界から見て精神界の「何の価値もないところ」こそが、彼が憧憬してやまない理想の地である以上、彼は愚直にもその場所を確保しようとするだろう。その方法がロッキング・チェアに肉体を拘束して、精神界を抽出するというものであった。そうすると、マーフィーのこのロッキング・チェアに、彼が留守の間セリアが座ってみると、彼女も彼のように「裸になって縛られたいという欲求」を感じるようになったという状況は、彼女の気持ちがマーフィーの思考に近づいてきたということを意味する。つまり、現実生活を捨てて精神界に行ってみるだけの価値があると、彼女が気づき始めたということになる。ただし、彼女はマーフィーのように全面的に現実生活を否定してしまうところまで、飛躍をしないことは確かであろう。マーフィーが帰宅すれば、彼女はその日の夕食を作ることを放棄できないのだ。

マーフィーは精神界で生きようとする。しかし、セリアとの愛情は現実生活なしには成立しない。この世の悲運をあの世で実現しようとするれば、ロッキング・チェアで夢に浸るだけでは十分でない。マーフィーは「自分の世界は喪中なんだ⁽⁹⁾」と言うけれども、二人共が死の世界を選んでしまえば、その時点で愛は結ばれるとはいえ、死の精神界で実った愛に誰が祝福を送るのか。他人の祝福のない愛でも本人たちは幸福であ

るとはいえ、この幸福は二人の結びつき以外の何を求めるのであろうか。精神界に愛の発展はあるのだろうか。マーフィーは労働が生の実質を失わせると言うが、全面的にそれを放棄することは叶わない。なぜなら、人間は生物であって、生きるための衣、食、住の糧を必要とするからである。また反面、人間は思考力を持つ以上、精神界を作り出すことを希求する。この現世にない理想を思い描いてこそ、人間の生きる価値が増大する。結局のところマーフィーはセリアと別れて、精神病院の雑役係として働くことを決意した。一体一時的にもせよ、二人の愛は実ったのか。マーフィーという存在は人間界の矛盾として、今も人の精神に問いかけてくる。

二、生存の否認

マーフィーはセリアという恋人を得たけれども、一緒に暮らすとなると、彼の結婚観は恋人を大いに悩ますことになる。彼は労働が愛情を破壊すると相手に告げたのである。財産のない人間が仕事をしないで生きていけるかどうか。自分の子供が職に就くこともなく家の中に閉じこもっているとしたら、親の投げつける言葉は、「働かざる者、食うべからず」の一言であろう。小説『モロイ』の中で、私立探偵モランが息子と一緒に捜索に出たとき、彼に与えた言葉は「なしで済ませろ⁽¹⁰⁾」という教訓であった。ここでの意味合いは勿論、 unnecessary な物は買わないで、手元にある物でうまくやり繰りせよ、ということだが、それが労働もなしで済ませろということになると、節約どころではなくなってしまう。なぜなら、労働拒否は収入のないことを意味する。無収入であれば unnecessary な物だけに留まらず、絶対的に必要な物までも買うことが出来なくなる。今日、食べる食料がない。どうやって生きていけば良いのか。泥棒に走るのか。

命を無くしてしまえば事は完了するが、それは最後の手段である。何ゆえにマーフィーは、セリアに労働禁止を言い渡すのか。

マーフィーの人生においては、「何の価値もないところで、何のものも望まず」というのが彼の主義であった。「何の価値もない」とは彼の生存する現実世界において価値がないということだが、労働が人間一般にとって第一義的な価値を持つ以上、それはマーフィーによって即刻拒否されるものであるだろう。働かない人間が「何も望まず」という精神で人生を生きてゆけるかといえば、望まなくとも必要なものは山ほど存在する。美食を望まなくても、命をつなぐ最低限の食料は必要である。空腹を覚えたとき、エストラゴンは相棒から人参をもらって食べたし、ポゾーからは捨てた鶏の骨を喜んでもらい受けた。モロイならビールを五、六本一気に飲んだあと、一週間何も飲むことはなかった。そして、小石を口にして飢えを紛らわした。小説『ワット』のノット氏なら、召使いのワットが作る、様々な食材を一つ鍋で煮込んだ雑炊のようなものを、一週間毎日食べ続けるのである。このようにベケットの主人公たちは食事に価値を認めず、粗食に甘んじている。

なぜマーフィーにしろ、モロイにしろ、ベケットの登場人物は、食事を一般の人間並みに十分に取ろうとしないのか。それは飲食がこの現実世界で生存していくためには、最大の不可欠なものだからである。人間は生命体である以上、肉体の維持のためには養分を供給しなければならぬ。もしこれを拒むとすれば命を捨てることを意味するが、それ程にも絶食しないにしても、モロイやノット氏のように最低限の食料しか摂取しないとすれば、それは人間が現実世界で生物として生きること嫌悪感を抱いていることの表れであろう。肉体的な病気や人間関係に対する精神的な不安という原因があつて、拒食症に陥る人もある。また別の人は自らの人生に対する主義として、この現世に生存することに深い憂慮を抱いている。この後者の場合が、ベケットが作品に描くところの登

場人物たちであろう。

そうした光景や物音は、彼の好まないものだった。それらのものは、それらが加わり、そして彼の方ではできれば加わりたくないと願っている世界に、彼を引き留めていた。彼は自分の輝きを解体させているものは何なのか、物売りが叫んでいるのは何なのかと、そっと自問してみた。そっと、ほんとにそっとだけ⁽¹⁾。

「光景や物音」とは、マーフィーが自分の部屋でロッキング・チェアに横たわった時に聞こえてきた鳥のカッコウの鳴き声であり、道路で叫んでいる物売りの声であり、そうした生物の存在する光景である。こうした光景や物音は自然界に属している。勿論、それを見聞きしているマーフィーも自然界の存在であって、他の生物から人間である彼自身を区別することには、異議を唱えることも可能であろう。ただマーフィーの場合、動物に対して人間を優越させるという生物分類ではなく、「物売りの叫び声」をも嫌っていることから、声の持ち主である人間をも嫌悪の対象にしている。だから、人間も自然界の一員であって、ここで現実界から離脱を図ろうとしているのはマーフィー一人だけの問題なのである。

マーフィーは現実界に「加わりたくないと願っている」。現実界で彼も生存しているのに、そこに帰属したくないとなれば、マーフィーはどこに存在したら良いのだろうか。彼はロッキング・チェアに体を身動きできないほどに縛り付けた。肉体をリラックスさせるはずの道具に、反対にそれを意志のない物体のように固定化してしまった。ただし肉体を拘束するとしても、その一番上に備わっている頭脳だけは、紐の監視から容易に逃走してしまうだろう。頭脳はその思考力によって精神界を作り出す。しかも目には見えない世界として、他人には気づかれない独自

の想像界を構築する。マーフィーは、「自分の輝きを解体させているものは何なのか」と問う。この「輝き」とは恐らく、彼の自由な生き方という意味であろう。彼が属する人間社会において、マーフィーは自分の思い通りの生活が出来ていないと感じている。人間の慣習に従い、他人と同じ日課をこなし、共同生活をするのに適応できる知識をたくわえ、命を絶やさないうだけの食物を取り、そしてそれらを実行するために、金銭を得るべく労働に身を捧げる。こうした一連の社会的行動は、決してマーフィーを「輝き」ある存在と思わせないであろう。彼は他人に束縛されない自由な生き方を求めている。マーフィーはセリアに言う、「君の言葉が僕に教えている金もうけ主義の地獄では、みんな駄目になってしまう⁽¹²⁾」。

マーフィーは現実世界を嫌い、精神界で生きたいと願っている。彼が宗教家であるなら、自分一人で教会に閉じこもって神と対話をし、人間が生存するのに相応しい永遠の世界とは何かを思案するであろう。まだ彼が神のような絶対的な真理を見出していないとすれば、その真理の追究のために俗世を捨てて行脚の旅^{あんぎや}に向かうであろう。しかし、マーフィーは宗教家になろうと念願するわけでもなければ、自ら新しい理念世界を構築しようと志すわけでもない。彼は単に現在生きているところの人間社会に不満を覚え、自分一人の自由の地を獲得したいだけのことである。もし彼の周りにいる人間が彼のことを気に掛けず、彼の望むままの行動を認めてくれるなら、この現実世界から逃避したいという願いは起こらないであろう。彼が労働したくないと言うなら、それも可能ではあるが、しかしこの無職であるということにおいて、彼はすでに社会からの脱落者であるという負の烙印を押されるのである。マーフィーが理想として提示する世界は、人間社会から隔離された小世界である。

大きな世界の泥のぬかるみの中を歩き回る人間にとって、まったく

完璧に小世界の中で実現された生の実例以上にわくわくさせる材料があるだろうか。

マットレスを張りつけた独房は、彼が内面の樂園について想像できた全てのものよりもはるかに優れて⁽¹³⁾いた。

マーフィーは現実の「大きな世界」を嫌って、「小世界」である精神病院の「独房」に生存する方を好むと言う。彼の勤めることになった精神病院で、彼は夜中に病室の患者が確かにそこに居るか見回っている。その人間社会から隔離された病室、つまり「独房」こそが理想の地だと考える精神にとって、この現実世界は汚れた「泥」に等しい憎悪の対象となる。なぜそれ程にまで、現実生活はマーフィーから嫌悪されねばならないのか。彼は過去においてトラウマと化するような重大な肉体的、精神的被害を他人から受けたのか。小説がそのことを語ろうとしないなら、マーフィーの生まれつきの性向から精神界を重んじているのか。とにかく、彼は現実の社会生活に対して、働くことが人間性を破壊するという根本的な信念を抱いている。

『マーフィー』の刊行は1938年である。この同じ年に哲学者ジャン＝ポール・サルトルの小説『嘔吐』も出版された。この作品は歴史研究家の主人公ロカンタンが存在することの意義について、人間関係だけに留まらず物体との関係においても疑問を持つという内容である。物体の属性も単なる仮象にすぎないと考える彼は、マロニエの木の根を見つめていると、自分がその根になったような意識に捕らわれて「嘔吐」を覚える。彼は人間が存在することの認識について考える。「存在することへの憎悪も嫌悪も結局のところは〈私を存在させ〉、存在の中へと私を追いこむ方法である⁽¹⁴⁾」。ロカンタンは存在することに嫌悪を抱いている。しかしながら、彼は思考力に信頼を置いているために、その嫌悪することの意識によって、かえって彼自身が存在していることを認識すること

になる。この箇所のすぐ後で、このようにも考える。「私はなぜ考えるのか、私はもう考えたくない、私は存在したくないと考えるから、私は⁽¹⁵⁾在る」。ロカントンはデカルトにならって「考えるから、私は在る」と言うが、その思考内容において反対の「存在したくない」という主張を掲げる。この矛盾する命題の中で、矛盾していないのは「考える」という思考作用である。思考するという認識作用と、その思考内容とは別物である。従って、思考内容と認識作用とは矛盾することなく両立できることになるが、この思考段階に留まる限り、つまり一個人の内面に留まる限り、サルトルにおいて社会との軋轢^{あつれき}は生じないであろう。それでは、ベケットではどうか。

マーフィーもこの現世に嫌悪を抱いて、出来れば精神世界に移りたいと考える。彼は家の外から聞こえる鳥の鳴き声や人の叫び声の届かない世界に行こうとして、自分の肉体をロッキング・チェアに縛り付けた。しかし、ここで彼はサルトルにならって、自分がこの現実世界に存在したくないと考えるから、自分は存在しているというように、思考する者自身の存在をこの現実⁽¹⁶⁾に留めおくことに納得しないであろう。思考内容と無関係に自分の存在を安全地帯に確保しておくことは、マーフィーには起り得ないことである。この世に存在したくないと考えるのなら、全力を尽くして肉体を消去してしまわねばならない。そうして肉体の消滅を果たしたうえで精神界へと飛翔することこそ、彼の欲望に相応しい存在の在り方である。マーフィーは精神病院の独房を自分の最適な場所と考える。この隔絶した状態が、彼が人間社会に対して憎悪を抱き、それへの実際的な反抗として彼の在りうべき世界を示している。独房の中で誰からも邪魔されることなく、彼は理想世界を想像する。その時、彼の肉体はこの現世に存在することを否定されている。

それは思考による拷問、生存による苦痛だった。というのも、思考

は偽り、生存はごまかしであり、トンネルの外にあったからだ。しかし、影の世界、トンネルの中では、精神が墓胎となると、思考も生存も⁽¹⁶⁾真実のものとなり、生きた思考となった。

これは『並には勝る女たちの夢』と題したベケットの最初の小説作品で、1932年に執筆されたにも係わらず、没後の1992年になってようやく出版されたものである。主人公のベラックワはダンテの『神曲』、「煉獄篇」に登場する怠け者の代表者と言える人物で、ベケットはその名前を彼の作品に借用した。ベラックワは何人かの女性と恋をするが、直接面と向かって愛情を表現することは苦手で、出来れば相手から離れた状態で思慕することを好んだ。そして、現実世界よりも精神的世界を希求するのだった。「思考は偽り、生存はごまかし」という言葉からは、地上における人間の打算づくめの思考は忌避されるべきものであり、社会慣習に従って行われる日常行為や労働は人間の自発的なものではない、という信条が読み取れる。彼は人間の行動が見えなくなる「影の世界」が好ましいものと思い、そこでは人間の精神が生活の強制を受けることなく、自由に躍動することを願っている。従って、サルトルが説くような人間存在への嫌悪がかえってその人物の生存を保証するというような、思考内容と実態の乖離に彼は同意しかねるであろう。現実世界の存在を否定するのであれば、その否定する者としての存在も否定しなければ、同語反復に陥るばかりである。精神世界を標榜するベラックワは、人間の労働を拒否した怠け者として、地上の価値に敢然と背を向ける。

ベケットの主人公は自分の肉体的存在を、この地上から消去してしまいたいと考える。マーフィーは体を椅子に縛り付けて身動きできなくさせたし、独房において人間社会から自分の肉体を隔離した。ベラックワは人間の生存を虚偽と見なし、怠惰であることを賞賛した。現実世界の中で自分の存在を消去してしまうことが、精神世界で生きるための手段

として実行される。しかし、実際に肉体的存在を完全に排除してしまうことは難しい。なぜなら、彼は人間社会の中で労働を拒絶するとしても、社会から慈善の寄付をもらい受けて生活を維持している。何も食料を取らないで餓死してしまう人物は、ベケットの作中人物にはいない。肉体としての生存は残しながら、精神世界の自由を確保する必要がある。

ベケットと同時代の思想家ジョルジュ・バタイユは『内的体験』(1943年)の中で、人間存在の在り方について語っている。「もし自己がおのれを放棄し、そしておのれと共に知識が放棄されるなら、また自己がこの放棄の中で非一知に身をささげらば、法悦が始まる⁽¹⁷⁾」。彼は沈黙の中に世界の不条理を聞き取り、知識を捨てるとともに供犠に身を投じるよう論ず^{きと}。この供犠において人は不安とともに恍惚に到るわけだが、バタイユではそうした人間の究極の目標として、聖なるものの体験を得ようとする。自己の存在を失うことによって神聖なものに近づくことを、彼は強く希求する。こうした供犠や祭りにおける熱狂の中での自己放棄は、確かに聖なるものの精神世界へと人を導くであろう。しかしながら、これは祭儀における一時的な興奮であって、現実生活において常時この状態を維持することは難しい。しかも、こうした神懸かり的な熱狂は、一部の選ばれた人間に限られるであろう。自己を放棄する人間をバタイユもベケットも称揚しているが、バタイユでは聖なる世界を体験することを目的としているのに対して、ベケットでは肉体的存在を否定して、精神世界の自由な生き方を求めている。ベケットにおいて精神界で聖なる境地に到ることも有り得ようが、それよりも彼は労働拒否という誰にでも起こりうるような、人間の根本的な生存方法を問おうとしているのである。

ベケットは「何の価値もないところで、何ものも望まず」という生存方法、人間の現実生活において何の仕事もせず、怠惰に任せて生きてゆける生存方法、そしてこうした人間の生き方に対する信条が、実際の人

間社会において可能かという問いを提出している。彼は食べる物も満足に得られず、定住の家をも持たず、雨ざらしの荒野で放浪の旅をすることが、果たして意義のあることなのか、この根本的な問いを彼の作中人物に投げかけているのである。

三、不在者の存在

マーフィーは自分の部屋にあるロッキング・チェアに体を縛り付けて身動きできないように固定した。ロッキング・チェアとは体を揺ることで快適さをもたらす物であるはずなのに、なぜかマーフィーは反対に肉体を拘束することによって、それを消滅させようと考えている。しかし、頭脳だけは活動することを許されていて、それは彼に想像による精神界をもたらす。この精神界において、マーフィーは彼の自由な生存の楽しみを十分に得るのである。肉体と精神、この二元論において、彼は精神のみに存在権を与えようとしている。ただし、肉体は出来うればこの現実世界から追放してしまいたいと考えるものの、頭脳という肉体なしに精神界が成立するかどうか。精神界を生み出すには、頭脳は肉体の不可欠な要素であって、二つを分離することは難しい。一体、人間の肉体、そして人間の現実における生存という条件なしで、精神界は存立できるのか。

『マーフィー』の次に執筆された作品が『ワット』という小説である。これはマーフィーと同様、浮浪者——ただし、マーフィーは自分の部屋を所有していた——であるワットがある時、ノット氏という人物のもとで召使いとして雇用されることになった。彼がノット邸にやってくると、他にもう一人の召使いがいて主人の世話をしていた。ワットは主人の食事を一週間分、まとめて作るという仕事を与えられると、それは一つ鍋

の中で様々な食材を煮込むだけのもので、彼のような調理に不慣れな者でも何とか作ることができた。しかし、その出来上がった食事を主人の部屋へ運ぶと、主人は召使いに顔を見せることもなく、また会話を交わすこともなく、一人だけで隠れるように食事を済ませた。一体、ノット氏とは何者なのか。彼は離れた所からは背が高く太っているように見えるし、別の日には背が低く痩せていた。また顔は青白く、髪は褐色に見えたかと思うと、別の日には赤ら顔で金髪だった。一体、彼の正しい外見はどのようなものなのか、一年以上も一緒に住んでいる者にも確かなところは分からない。

ノット氏の家の中の様子も整然としたものではなかった。家具は日によって位置が変わっていて、暖炉の横にタンスが置かれていたかと思うと、別の日にはベッドの脇に移動していた。しかも、家具の脚が正常に下向きにあるかと思えば、別の日には上を向いて逆さになっていた。そして、ノット氏自身はトイレなどの部屋の配置を明確に覚えていなくて、それを捜すために夜中に家中を歩き回るのだった。一体、ノット氏とは夢遊病者であるのか。

ノット氏が住んでいたのは、彼と召使いの使用のために用意されていた大きな部屋で、それは空ろな沈黙と閉ざされた闇の場所だった。そして、この雰囲気は部屋の外にまで彼について回り、家の中であろうと庭であろうと、彼の行くところどこでも彼を追いかけ、そのすべての場所を暗くし、精気をなくし、沈黙させ、すべてを麻痺させるのだった。⁽⁸⁸⁾

ノット氏は「沈黙と闇」の部屋に住んでいる。そこは召使いも主人の使用のために使用する場所であるにも係わらず、二人の召使いは主人の外見をよく知らないし、直接主人の口から用事を言い渡されることも起こ

らない。ノット氏はどうして他人に姿を見せようとししないのか。彼は他人との交渉が苦手な人間嫌いであるのか。一体、姿も見せず会話もしない人間は、何のために生存しているのか。ノット氏が自分の生きがいのために、何かすることがあるのだろうか。家の中に閉じこもって、何か仕事のようなことをするのだろうか。絵や音楽やスポーツというような、趣味らしきことでもするのだろうか。犬や猫のような動物を飼って、話し相手とするのだろうか。このどれもが、作品の中では実行されたという説明はない。彼は大きな邸宅に住み、二人の召使いを雇っている。それらを維持していくだけの資産はあるのだろうか、家計の運用もすべて召使いに任せて、金銭感覚を持ち合わせないのか。日常の雑事を彼はすべて遠ざけ、仙人のような暮らしをしているのか。

ノット氏は第一に何も必要としないことを必要とすること、第二に、彼が何も必要としていないことの証明となるものを必要とすること以外には、何も必要としないのであるから、自分自身に関しては、何事をも知らなかった。だから、彼は自分を証明できる人物を必要とする。何かを知るためではない。そうではなく、自分の存在がなくならないためなのだ。⁽¹⁹⁾

これはノット氏自身の考えではなく、召使いのワットが判断したものである。彼はノット氏が何も必要としていないと言うが、実際のところは色々な物を必要としていることは明らかだ。彼はワットが作るようになった一日に二回の食事を必要とし、さらに彼の住まう大邸宅と二人の召使いを必要としている。大邸宅と召使いといえば、一般の人間から見れば、生活用品としては必要を超えたものであるに違いない。それをワットは忘れているとしても、「自分の存在がなくならないために、自分を証明できる人物を必要とする」というワットの考えは、少しばかり奇妙

である。ここで言う「証明できる人物」というのは、恐らく二人の召使いのことであろう。この召使いは二年間の期限付きで雇用されているのだが、一体、姿を間近で見たこともなければ、直接話をしたこともない人物の証人になれるのだろうか。仮になれるとして、もっと根本的なことは、ノット氏自身が「自分の存在がなくなる」ということに不安を抱いているのか、という点である。彼は他人に姿を見せない。自分の存在が確実であることを望むなら、どうして人前に姿を現さないのか。彼は他人と話をしない。自分の存在が人間として認められることを欲するなら、どうして挨拶の一つも交わさないのか。

ノット氏は不在であることを望んでいる。しかし、彼が存在しているということは確かであればならない。存在しているのに不在である。何のために不在である必要があるのだろうか。それは彼が人間としての生存条件を拒否しつつ、なおも人間として生きていなければならないからである。人間の条件を捨て去って、なおも人間として存在する。このことに意味があるのだろうか。人間は社会集団を作って存在している。そこには法律があり、人間に一定の従属を課している。人は自由自在に生きる権利を奪われて、卑小化した精神に甘んじなければならない。そこには社会慣習があり、定められた家に居住し、生物を捕らえて自分の食料とする。何ゆえに人は殺生を犯してまで生きる権利があるのか。そこには人間の競争社会がある。人間は互いに助け合うと同時に、能力という名を借りて他人と競い合わなければならない。そして、富を求めて戦争にまで走り殺人を犯す。一体、人間に精神的な進歩があるのか。人間は地上の肉体的存在から離れて、また労働という苦役から離れて、精神の自由世界に生きる幸福を持つ必要があるだろう。

ベケットは小説を書き始める前に、まず語学教師として出発した。彼はダブリンのトリニティ・カレッジを卒業したあと、パリ師範学校の英語教師として赴任し、そこで同じアイルランド出身のジェイムズ・ジョ

イスの知遇を得た。この時、ベケットが執筆したのが評論『プルースト』である。プルーストとは無意識的記憶から過去の現象の本質を把握するという心情の間欠性を主題にした小説家で、大著『失われた時を求めて』は1927年に全七巻の出版が完結した。ベケットがパリへ赴任したのは1928年であった。二人の思想を比較してみると共通点があつて、若きベケットはプルーストから大いに刺激を受けたであろうことが理解できる。

語り手は、マンテーニャという画家が描いている深紅の衣をまとった大天使のように、最終章で勝利を歌いあげる七重奏曲の緋色の楽句の中に、独特で本質的な美、独特な世界、ヴァントウイユの不変の世界と美、それらのものが非物質的で観念的なものとして表明されているのを見る。ヴァントウイユの世界はソナタにおける祈りや懇願のごとく、また七重奏曲における希望のごとく遠慮がちに表現されていて、地上における肉体の生命を罰として呪い、〈死者〉なる言葉の意味を明らかにする〈目には見えない現実〉なのである。⁽²⁾

これは評論『プルースト』の中で、最後のページに述べられている文章である。ヴァントウイユという作曲家は小説『失われた時を求めて』において、主人公のマルセルがそのピアノ曲を特に好んだ作中人物である。ベケットは彼の音楽性について、「地上における肉体の生命を罰として呪う」と言う。この言葉は小説の語り手自身が抱いた思いなのか、それともベケットが語り手マルセルの心情を察知して述べているのか判然としないが、恐らく二人の思考が共鳴しているのであろう。プルーストは現在の時点における行為よりも、彼の追想の中において浮かび上がる情感を重視している作家である。彼はその時々において苦しみを受ける人間存在に対し、常に何らかの理由付けを行おうとする。それは小説

の主人公が過去を振り返る形式で記述していることから、過去の事実は常に語り手の判断を受けるためである。実ることのない恋は、相手と同時に自分の生存をも「呪う」ことになるであろう。愛すれば愛するほど相手の女性が遠ざかっていくとき、愛する者の愛情は自分自身の存在についても憎しみを抱くのである。こうした時、プルーストの主人公は恋人の女性が自分と一緒に居るよりも、彼女が外出していて不在のの方が、より穏やかに彼女を愛することができるという。不在の女性は追想の中で彼が嫉妬心を持つことなく、不品行に怒りを覚えることもなく、穏やかな心情で彼女と接することが出来るからである。不在の女性とは「目に見えない現実」であって、愛の真実を語るものであろう。

作家プルーストは、語り手マルセルは、そしてベケットは現実に存在する肉体を持った人間よりも、音楽におけるように抽象化された、目には見えない不在の世界を愛好している。小説の語り手マルセルが恋人に対する素直な気持ちを持てるのは、彼女が外出して不在の時であると同時に、もう一つ別の状況において、彼はこうした満足のいく幸福を味わう。それは恋人が眠っている時であって、モーリス・ブランショはその評論『火の部分』において述べている。

アルベルチヌがプルーストの奇妙な愛となるのは、彼女が眠っている時だ。その時、彼女の不在が存在するように思え、その眠りは彼女の中にある未知なるものを消し去ることなく実現し、捕らえることのできない不思議な女を、閉じ込めることのできない自由を引き渡してくれるのだ。⁽²⁾

眠りはプルーストの『失われた時を求めて』において、非常に重要な役割を果たす。というのも、眠りにおいて過去の色々な記憶が主人公によみがえってくるからだ。作家はこの小説の第一巻にあたる「スワン家

のほうへ」の冒頭を、主人公が宵寝よいねをする場面から書き始めており、そこで、「眠っている人間は時間の糸を、歳月や万物の秩序を自分の周りに輪②のように身につけている」と語る。眠っている人間は、過去の色々な出来事を記憶の中に留めている。目覚めている人間でも当然ながら過去の記憶を持っているとはいえ、眠りの状態にある人間は同時にその時点における状況に対して脳を働かせ、過去の重要でないことに対しては忘却に任せている。過去の事実としてある表面的な記憶よりも、より深いところに沈んでいる本質的な記憶、その人間の情感に係わるような記憶は、覚醒時よりも雑念に捕らわれない睡眠時の方が、その人間にとって想起しやすいであろう。だから、睡眠は過去の情操的な記憶の宝庫であって、夢の中に、また思いがけない追想の中に、人は過去の出来事に対する本質的な意味合いを改めて発見するのである。

眠っている人間は、隠された秘密をその身体に内包している。その秘密を見つけ出すことは、その人物を眺める者にとって容易であるように思える。なぜなら、その女性は睡眠の中で無抵抗であって、命令にさえ素直に従うであろう。眺める者を苦しめた過去の事実はすべて彼女の眠りの中であって、一言の合図で彼女は告白するであろうと思える。彼女は今や嫉妬を起こさせるような存在ではなく、彼の愛情を素直に受け入れてくれるように見える。眠っている女性は、男の望むものをすべて備えているようにさえ確信できる。眠っている肉体は目の前に存在しており、彼女の自分に対する愛情は眠りの奥深くに在りながらも、眺める者の自由に任されている。彼女の愛情はこの眠りの中にこそ存在する。しかしながら、その真の愛情は同時に彼女の眠りに包みこまれていて、眼前には不在の状態なのである。同時に真実の女性は不在であるけれども、眼前にはそれを隠し持った眠る女性がいる。真実の彼女は不在であるとしても、その不在は眠る彼女として現前している。プルーストは眠る女性の中に、現実の愛憎を離れた純粋な存在を見出すのである。

ノット氏に戻るとしよう。不在は何かの存在の消失である以上、その何かは実物としてはもはや存在しないとしても、かつては存在していたものである。たとえかつて実在しなかったとしても、それは人の思考の中に仮象として形成されていたものであるに違いない。不在は完全な無の状態では有り得ず、思考の中でイメージとして、そのイメージを支える言葉として存在が許されているものであろう。ノット氏は大邸宅で他人に姿を見せることもなければ、言葉を発することもなく生存している。しかし、彼の住居には二人の召使いがいて彼の世話をしているし、その召使いが作った食事を少量とはいえ食べている。ノット氏に隠されていることは、彼が他人と人間的な交際をしないということではなく、彼が何の目的を持って人生を送ろうとしているのかという点である。

人はただ食事を取って生きているだけの存在ではない。この地上に生を得ている以上、何かの生きがいを持って人生を過ごさねばならない。犬や鳥というような動物なら、その日に食べる食物を確保することが一番の目的であり、それだけで十分なのである。ところが、人間はどうか。何かの理由で、その日の食事に事欠く人間も確かにいるだろう。病気であり、貧困であり、戦争であり、災害でありというような原因による不幸である。しかし、その最低限の困窮から抜け出したとき、人は何かの生きがいを持たなくては、その生命が躍動することはない。ノット氏に何か生きがいがあるだろうか。彼は空ろな沈黙と閉ざされた闇の住居で生活している。他人と接触することを拒み、与えられたままの食事を取る。一体、ノット氏は何のために生存しているのか。この世に生まれた以上、死を選ぶことも出来なくて、生きながらえているだけなのか。小説家ベケットは、しかしながら、そのような無気力な人間を単に描いたのではないことは明らかであろう。

ノット氏は大邸宅で幽霊のような生活をしている。彼は何も仕事をしない。なぜ働かないのか。労働を嫌ったのは、セリアに恋をしたマーフ

イーであった。彼は恋人に対しても、労働が愛を破壊すると告げた。なぜ労働が愛の純粋さを傷つけることになるのか、その明確な理由を作者は与えようとしな。ただし、マーフィーは地上の「何の価値もないところ」で生きていきたいと願っている。人間にとって、労働は生存していくための一番重要な価値である。これを拒否する以上、愛の純粋さどころか生命の保証も失われてしまう。彼は恋人セリアと別れて精神病院で働くことを決意するが、自分の主義に背いた罰として作者が与えた結末は、ガスストーブの爆発による死であった。マーフィーは彼の信条として労働を拒否した。一方ノット氏は一人身で、仕事をしなくても二人の召使いに助けられて、生活していけるだけの資産を所有しているのである。だから、労働拒否を貫いたとしても、彼に不幸は起こらない。

ノット氏は何ゆえに他人に姿を見せないのか。姿を間近に見せなくても、二人の召使いにその存在は知れている。ガストン・ルルーの『オペラ座の怪人』のように、肉体に他人には見せられない傷を持っている訳ではない。彼はこの世に生存するとしても、ベケットがブルーストを論じたように、「肉体の生命を罰として呪っている」のか。そう考えることも不合理ではない。自ら労働拒否をした者が食事も満足に取らないとすれば、それは彼が自らの肉体を滅ぼそうと思っていることの証であろう。食事を拒絶する者は、ミイラになって精神世界に生きることを願っている。そこには人間社会から非難されることのない、自由な生き方があるに違いない。ノット氏とは、無職のままでも生きてゆけるマーフィーであるのだろう。彼は地上の幸福ではなく精神の王国を目指しているのだから、この現実世界において生きるための目標を必要としない。彼は現世に存在している。しかしながら、この世での人生の目標は何も持ち合わせない。彼の生きがいは天上の世界にある。彼が大きな邸宅に生活するとしても、そこには彼の不在が存在しているだけなのである。

注

- (1) サミュエル・ベケット、『マーフィー』、Samuel Beckett, *Murphy*, Les Éditions de Minuit, 1947, p. 23
- (2) 前掲書、p. 59
- (3) 前掲書、p. 59
- (4) 前掲書、p. 64
- (5) 前掲書、p. 62
- (6) 『聖書』、『新約聖書』、『ヨハネの黙示録』、フェデリコ・バルバロ訳、講談社、一九八〇年、三九四頁
- (7) 『マーフィー』、Beckett, *Murphy*, p. 64
- (8) 前掲書、p. 153
- (9) 前掲書、p. 34
- (10) 『モロイ』、Beckett, *Molloy*, Les Éditions de Minuit, 1951, p. 170
- (11) 『マーフィー』、Beckett, *Murphy*, p. 10
- (12) 前掲書、p. 41
- (13) 前掲書、p. 154
- (14) ジャン=ポール・サルトル、『嘔吐』、Jean-Paul Sartre, *La Nausée*, *Œuvres romanesques*, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, 1982, p. 143
- (15) 前掲書、p. 144
- (16) 『並には勝る女たちの夢』、Beckett, *Dream of Fair to middling Women*, Arcade Publishing, 1992, p.45
- (17) ジョルジュ・バタイユ、『内的体験』、Georges Bataille, *L'Expérience intérieure*, Gallimard, 1943, pp. 67-68
- (18) 『ワット』、Beckett, *Watt*, Les Éditions de Minuit, 1968, p. 207
- (19) 前掲書、p. 210
- (20) 『ブルースト』、Beckett, *Proust*, Les Éditions de Minuit, 1990, p. 106
- (21) モーリス・ブランシヨ、『火の部分』、Maurice Blanchot, *La Part du feu*, Gallimard, 1949, p. 233
- (22) マルセル・ブルースト、『失われた時を求めて』、『スワン家のほうへ』、Marcel Proust, *A la recherche du temps perdu*, I, *Du côté de chez Swann*, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, 1954, p. 5